

## 都市 = 農村間の人的環流 集団化時期中国の「交叉地帯」をめぐって

田原史起

### はじめに——二元構造と交叉地帯

中国では1950年代末から1980年代初頭まで、20年強にわたる期間を「集団化時期」(集体化时期)と呼びならわす。本稿は、同時期から現在に至るまでの中国社会の特質を理解するために、これまでほとんど注意を払われてこなかった都市と農村の間の「交叉地帯」に注目してみる。

「交叉地帯」とは耳慣れない言葉であるが、簡便に定義すると、都市と農村が交錯する領域、あるいは完全に都市でも、完全に農村でもない中間地帯と考えてよい。「交叉地帯」(以下、括弧無しでこの語を用いる)を理解するには、それが成立する前提となっている「都市 = 農村二元構造」(城乡二元结构)を理解する必要がある。まずはそこから説き起こしていこう。

「二元構造」の存在は、毛沢東時代の中国を語る際の共通認識となっている。1950年代末～1980年代初頭にかけて、中国政府は国内社会を二つに分割して異なる原則で統治した。すなわち、都市住民は都市の正規・国有部門 = 「単位」システムの下に置かれたのに対し、農村住民は農村の非正規・集団部門 = 「人民公社」システムの下で統治されていた。およそ20年間にわたり、戸籍制度や食糧配給制度を通じて都市と農村の間の人口移動が制限された結果、両者の間にはある種の社会的亀裂が形成されることになった。

この期間を通じ、都市戸籍を有する人口は中国全体の20%を超えない程度にコントロールされていた。都市市民らは、正規部門の単位制度の下で商品化食糧を給付され、生活全般を手厚く保護された。国家の定員内の幹部や国有企業の正規労働者らは、社会主義的工業化の直接的な担い手としていわば優遇されたのである。

一方の非正規・集団 = 農村部門に属する人々は全人口の80%程度を占めたが、こちらの部門に対する政府の資源投入は最低限に抑えられた。その代わりに、「自力更生」が奨励された(Brown 2012)。農村部の人口管理を担ったのが、人民公社である。人民公社システムの大きな特徴の一つは、旧来の分散的で共同体不在の中国の農村社会を1つの巨大な労働組織に再編成したことである。政府の側から見れば、労働力の組織化を行うことで初めて、自ら資金を投ずることなく、農村住民にゼロから各種の財を生み出させ、余

剰部分を吸い上げることで、工業化のための蓄積を行うことが可能となった。また農村社会の側から見れば、労働力の組織化により初めて、小農経営に付きまとう極限性を克服し、コミュニティの全体的利益の観点から取り組みを行うことも可能になった。

以上をまとめると、都市は政府が手厚く面倒を見る「ガバメント」で生きたのにたいし、農村は政府に頼らず自力更生で生き残りを図る「ガバナンス」が作用していた(田原 2019)。「不平等であることからの出発」ともいえるかもしれない。この辺の感覚は、現代日本に生きる私たちの日常的経験からは理解しにくいものである。「全ての国民は平等であるべき」であり、政府は全国民にナショナル・ミニマムを保証すべき、とする前提から発想してしまうからである。「格差」それ自体がすなわち問題である、と考える習慣も内在的な理解を妨げる。しかし、差別と格差の存在を前提として国家建設をスタートせざるを得ない状況は、世界史的に見ればむしろ常態であったかもしれない。特に多民族と巨大な人口、広大な国土を合わせ持つ複合社会であれば、当然、内部に差別や不平等を抱えている。例えばインドではカースト制度に基づく差別が存在してきたことを認め、それを歴史的な前提としているからこそ、現在の政府の積極的格差是正政策も存在意義をもつ(Hasan 2009)。今世紀に入ってからの中国も、本稿が扱う時期まで農村・農民の犠牲の上に国家建設を行ってきたことを認めているからこそ、都市市民との間の格差を「三農問題」としてフレーミングし(Day 2013)、農村優遇政策を展開しているのである。

中国の場合、「都市」とそれ以外の地域の間には、そもそもの始まりからして「不平等」な関係があった。中国古代の城壁の内部に住む都市住民は「市民」的な平等性に支えられており、城壁の外部の野蛮人、農民からは区別された。城壁の内側に住み、一定のルールに従って行動できるのが、「中国人」に他ならなかった(岡田 1983)。してみれば、人民共和国の建国当初、まだ人口の 10% 程度にすぎなかった都市住民を社会主義的工業化の直接的な担い手として、特権的な人々として優遇し、その後 30 年にわたってその割合を 20% 内外に抑制し続けるという発想は、為政者、中央政府の側としても、また優遇を受けない多数派としての農民自身にとっても、ある意味、至極、当然なものとして受け止められたに違いない。

ともあれ、1950 年代の社会主義的変革を通じ、正規 = 国有と非正規 = 集団という相互補完的なシステムが形成され、その後の 20 年間で都市市民と農民の区別は「身分」として固定化され、両者は二つの異なる生活世界を生きることになった(Whyte 2010)。基本的な構図としては、以上のような理解が成り立つ。

同時に、これまで見過ごされがちであったのは、この都市 = 農村間の二元構造は全く固定的なものではなかったことである。両者の間には空間的・社会的な意味での人的環流が常に存在し、人々が行き交っていた。二元構造下の人の移動については、従来から、大都市の幹部や知識青年の視点から出発し、農村への派遣や下放や文化大革命期の「上

山下郷」運動など、衆目を集めやすい目立った人の移動が考察の対象となってきたといえる (Bernstein 1977; Brown 2012; 潘 2013)。逆に言えば、①農村住民側の視点から、②より小さな人的環流に着眼した社会学的・社会史的研究はほとんど見当たらない。②に関して、農村住民が実際に体験した都市との交流は、大都市からの知識青年との接触も無くはなかったろうが、より多くは小都市である県域や近接する地区レベル市などの小範囲での接触がほとんどであったと思われる。大多数の農村住民が生活体験として皮膚で感じた「都市」とは県域など身近な都市であり、遠く離れた大都市ではなかった。ここから本研究は、農村住民の具体的な生活の場である村落や、もっとも重要な地域社会である県域<sup>1)</sup>の周辺に視線を落とし、ミクロな視点から都市と農村の交叉地帯の問題を考えていく。交叉地帯を介した人の移動は地味で目立ちにくいだが、当時の社会的安定装置として、人材の貯水池として、極めて重要な役割を担ったと考えている。

交叉地帯の概念は、その時代を生きた名も無き人々の主観的体験や「文化心理」を浮き彫りにするのにも適している。実のところ交叉地帯とは、作家の路遥 (1949-1992) が最初に用い、安本実 (1995) が路遥文学のキー・ワードとして注目したものである。自身も農村出身者であった路は、1960～70年代に少・青年期を過ごした無数の中国の農村青年らの経験を代弁する。街への進学ややむを得ぬ帰郷により都市と農村の交叉地帯に生きることの内面的な葛藤や苦悶が、路遥のほぼ全ての小説の主旋律となっている。農村青年らによって「生きられた」交叉地帯の文化心理、とでもいうべきものに路は生涯、こだわり続けた。上昇を目指す希望や、下降を余儀なくされた不安や絶望などが無いまぜとなり、濃密な文化心理的体験が蓄積された場が県域社会であった。この主観的な体験自体、一つの興味深い研究テーマであるが、本稿ではこの問題に踏み込むだけの余裕がない。その代わり、まずは断片的な事例を拾い集めつつ、交叉地帯を介した人的環流の全体像を素描することを課題としたい。

以下、第1節では、筆者の調査地の一つである甘粛省西和県の県域、および同県に属する麦村<sup>2)</sup>という具体的な場に引きつけつつ、交叉地帯が形成されるメカニズムを理解する。第2節では、西和県において実際の交叉地帯がどのように現れ、人々がそのなかで生きていたのかを、引き続き現地調査のデータから描いてみる。第3節では、他地域の事例も参考にしながら、交叉地帯を跨いだ異なる領域間の人的環流のパターンを統合的に把握し、「むすび」でそれらの人的環流が持つインプリケーションについて触れる。

## 第1節 交叉地帯の形成

「県域」は都市と農村がワンセットとなった最もコンパクトな地域社会である。大雑把に見積もって、現在でも10億人ほどの中国人の住民生活が県域を舞台として展開している。その意味で、県域社会は都市＝農村二元構造が実際にどのように現れるのかを理解

するための有用なサンプルでもある。そこで本節では、甘肅省西和県において都市と農村がどのような関係にあるのか、について確認する。

「都市とは何か」「農村とは何か」というのは、突き詰めると実は難しい問いである。いくつかの尺度が併存しているからである。第一に、歴史文化的な理解がある。前述の通り、中国で伝統的に「都市」といえば、城壁で囲まれた政治都市を指し、県域社会に即して言えば、唯一、県城だけが狭義の都市である(斯波 2002)。その意味で、県域で都市住民といえば、県城住民のことになる。西和県では、建国当時、19万2000人ほどであった県人口が、1995年には34万5000人程度にまで増加した。そのうちの県城住民の数は、1949年の建国期に5000人ほど(人口比で2.6%)、1995時点で2万人強(同5.8%)とされる(西和县志编纂委員会 1997: 149-150)。すなわち、県域社会は圧倒的に農村住民で占められる社会であり続けている。集団化時期、中国全体で都市人口が20%程度に抑制されたと先に述べたのは、それが大都市を含めた平均値だからである。いっぽうで一般的な内陸部の県における県城の人口比率は、毛沢東時期を通じて5%を超えない水準であったろう。

第二に、農業人口と非農業人口を尺度としてみることもできる。図1によれば、西和県  
 の非農業人口は、1960~62年の三年間を除き、1970年代末まで、集団化時期を通じて

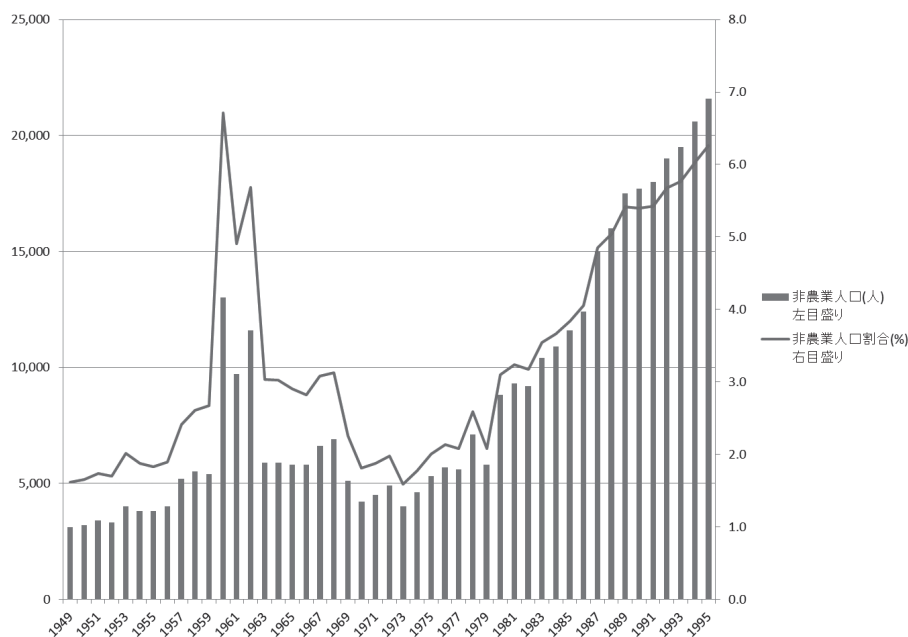


図1 西和県非農業人口の推移

出所) 西和县志编纂委員会 (1997: 261-262) を参照して筆者作成

わずか2%前後で推移していることがわかる。西和のような内陸の農業県で、非農業人口がいかに少数派であったかが知られる。例外的な時期は、図から知られる通り1959年前後の「大躍進」の前後であり、一時は非農業人口が7%程度まで跳ね上がっている。これは全国的な状況にも対応しているが、それまでの農業人口が工業部門になだれ込む現象が県レベルでも見られたということである。非農業人口は1960年代の初頭に再び3%以下にまで下降している。これは、一旦は都市の非農業部門吸収された農村住民が、人員削減措置(精簡)により、故郷の農村に追い返されたということの意味する。非農業人口の変動が政府により人為的にコントロールされていた点を如実に語るものである。

第三に、集団化時期においては都市と農村にはもう一つの含意が生まれた。すなわち、ある個人が「国営部門」に属しているか、あるいは「集団部門」に属しているか、という部門間の違いによって、都市カテゴリーの人なのか、農村カテゴリーの人なのかが区別された。これは戸籍による区別にも対応しており、ある個人が国有部門ないしは正規部門に所属していれば非農業戸籍(都市戸籍)、集団部門すなわち非正規部門に属していれば農業戸籍すなわち農民、という区別に対応していた。つまり、集団化時期の中国においては、「都市」と「農村」というのは、単なる歴史文化的あるいは経済地理学的な概念ではなく、人為的に作られた政治社会的カテゴリーに大きく重なるものだったのである。

以上、大まかにいえば、「都市」は県城住民、非農業従事者、正規=国有部門に対応するのに対し、「農村」は非県城住民、農業従事者、非正規=集団部門に対応していたといえる。

ところが同時に、より細かく見れば、歴史文化的、経済地理学的、政治社会的区分がそれぞれにズレてくることもしばしばであった。例えば労働部門において、多くの炭鉱・鉱山・農場・林場などの単位は正規=国有部門に属しているが、これらの職場の実際の立地は県域の農村部や辺鄙な山間部である場合がほとんどであろう(例えば西和県の鉱山が集中するLX郷は県城から遠く離れた県東南部にある)。さらに、炭鉱・鉱山・農場・林場での就業は、政府により定員が配分される正規部門ではあっても、「綺麗な仕事」つまりオフィス・ワークなどではなく、肉体的な負荷を伴うなどのギャップが存在する。立地や労働条件の悪さがあればこそ、県城=非農業=都市戸籍が三拍子揃った「純粹な」都市住民が好まないが、農村出身の志ある若者がもぐり込む余地のある、「交叉地帯」が形成され得た、ということである。また教育部門において、当時的高级中学は県域の最高学府であるとともに、概ね県城に置かれていた。同時に、農村戸籍の学生がそこに入学した場合でも、決して都市正規部門に入ったことにはならない。大学まで進学して卒業後の分配で正規部門に入らない限り、完全な都市=正規部門の住民とはなることはできなかった。さらにいえば、農村集団部門に属していても、農業に従事しない教師や医者が存在していたほか、農閑期を中心に、農田・水利の基本建設や植林など、あるいは農村工業化にからむ社隊企業など、人民公社には農業以外の活動領域も存在して

表1 都市・農村間の交叉地帯

	農村 農業 非正規・集団部門	交叉地帯	都市 商工業 正規・国有部門
行政	人民公社員	基層幹部	国家幹部
労働		基建隊	正規職員・労働者
		臨時工・契約工 (農場・林場・炭鉱)	
教育 医療		高級中学生	大学に進学・卒業後、 正規部門に
		民弁教師	公弁教師
		裸足の医者	正規医療従事者
軍事		従軍	軍隊幹部 退役後、正規部門に

出所) 筆者作成

いた。

このように、都市と農村を分ける三つの尺度の間の微妙なズレこそが交叉地帯を発生させていた。表1は、調査地の事例を参考に、異なる領域に跨り発生した交叉地帯の全体像を仮に示したものである。

## 第2節 交叉地帯に生きた人々

本節では、都市＝農村の交叉地帯を実際にどのように把握することが可能なのか、西和県と麦村に視点を据えながら、具体的な事例から描くことにしたい。

### (1) 行政

行政の領域で交叉地帯の一角を占めたのは、農村の基層幹部である。基層幹部は、農村に在住であり、集団部門に所属するが、完全な農業従事者ではなく、集団部門の管理者であることから、「純粋な」人民公社員とは異なっているからである。

正規部門の国家幹部<sup>3)</sup>に対して、非正規の集団部門の幹部は、指導幹部以外の人民公社の一般幹部、生産大隊幹部、生産隊幹部などである。人民公社レベルの指導者(公社書記・公社主任)は国家幹部であり、正規定員内の人員である。非正規の人員は、政府からではなく、それぞれの集団部門のあげる収益から報酬を得ている。国家幹部と非国

家幹部が対置されるこの構図は、現在に至っても基本的には変化していない。

基層幹部の定義の仕方は色々あるが、ポイントは三つある：①広範な住民と直接的に接しつつ、全人格的な要素を資源として、対面的な関係において指導力を発揮すること。②農村集団部門の人口や集団が保有する土地・資源・財産などの直接的な管理者・経営者であること、③社会主義中国のフォーマルな体制下において、正規部門の国家幹部とやり取りを行う際の、非正規・集団部門側の代表者であることである。基層幹部は、①の意味で、例えば民間の農村企業家や、宗族的権威者、あるいは宗教的リーダーなどと共通しているが、②と③において明らかに特殊な位置付けをもつ存在であった。

実のところ、基層幹部が②、③のような特徴を備えるに至った過程は、建国以来の中国農村の革命および社会主義の経験に引きつけることなしには理解が困難である。ごく簡単に振り返ってみる。共産党は革命事業の初期、1920～30年代においては、農村の自由人、ゴロツキ・匪賊につながるような勢力を味方につけ、政権奪取のために積極的に利用したといえる（田原 2008）。ところが、全国の農村を統治下に収め、社会主義的工業化のための農村からの資源調達が日程に上ると、農村統治のベースとしての「集団」と、その集団の代表者としての基層幹部が必要とされるようになった。基層幹部の起源は建国前後の大衆運動の展開過程にまで遡る。同時期には工作隊の派遣、土地改革、農業集団化等、大衆運動を通じた上からの農村リーダー形成が試みられた。定期的に仕掛けられた大衆運動と、それに伴う幹部のシャッフル・リシャッフルにより、不適合とみなされた幹部は淘汰された。建国初期の大衆運動を通じ、正当性の源泉が政府の権威にしかない大量の貧困層の農村青年がリクルートされ、徐々に住民らにも承認されて農村リーダーとなり、基層政権と基層幹部が形成された（田原 2004）。このように、農村基層部の諸単位は単なる行政単位として区画されたのではなく、広範な住民が参加する運動を通じ、ダイナミックな過程のなかで形成された点が重要である。いっぽうで毛沢東時代の農村には、企業家や宗教・宗族などインフォーマルなリーダーは存在する余地はなかった。農村リーダーは、集団部門の正規の代表者である基層幹部に一元化されていたのである。

とりわけ生産大隊のリーダーは、自身の存立基盤が社会主義的な「集団」にあることを理解しており、多少なりとも共産党のイデオロギーを内面化していた。端的に言えば、大衆のため、集団のため、国家のために献身し、自己・自家の利益は犠牲にすることをいとわない、そのような行動原理を備えており、あるいはそうあることを求められていた。彼／彼女らは1960～70年代の主演であり、改革開放前後に退職の年齢を迎えた人々である。調査村の麦村でそのような代表例は、宋李大隊書記の李言照である。筆者は2010年と2016年に李と面談を行ったが、その言葉や態度から感じとられた大きな指針は、要約すると次のようなものである（田原 2019: 188-189）。

第一に、国家と集団に対して責任を負うことである。すなわち、「大衆を決して飢えさ

せない」とともに、「政府の任務も必ず完遂する」、というものである。李が書記をしていた1960～70年代、宋李大隊は毎年、約20万斤(100t)の食糧を国家に上納していた。李自身は「政府も大衆も、私を支持してくれた」と総括している。第二に、「大衆を飢えさせない」と「国家への食糧供出任務を完遂する」という両者の間に解きたい矛盾が生じた際、彼らは大衆(集団)の側につく。大躍進後、1958～60年ころ展開された「反右傾運動」では、李は飢えた村民に秘密裏に食糧を与えたことを批判され、大隊の「積極分子」に7度ほど殴打された。大衆はそれを見て涙を流した。李は殴打され、身体は痛みに耐えていたが、内心は間違ったことはしていないと誇りに思ったという。第三に、幹部の資質として、「絶対的に潔白である」ことを強調する。それは端的には、集団の資源を私的に流用しないことである。すなわち、大隊幹部として彼が責任を負うのは生産大隊という「集団」の枠内に居住する「大衆」(群众)の利益であり、特定の縁者ではない。私的な「つながり」を超越する価値として集団的な「まとまり」が主導されたのが毛沢東時代であり、個人によって適応度合いに差はあったろうが、集団の価値に同化を求められたのが基層幹部、とりわけ大隊幹部であった。

都市の「単位」と農村の「人民公社」という二元システムの下では、所属先は個々人の身元証明の拠り所であった。農村集団部門を一旦離脱して、外部に移動するためには、基層幹部の許可や支持を得る必要があった。以下にみていく通り、甘肅麦村の場合、労働組織である基建隊、林場の契約工などの人員の選抜と上級組織への推薦、また知識青年・帰郷青年の受け入れなど、基層幹部は、農村集団部門の「ゲート・キーパー」としての役割を担っていた。

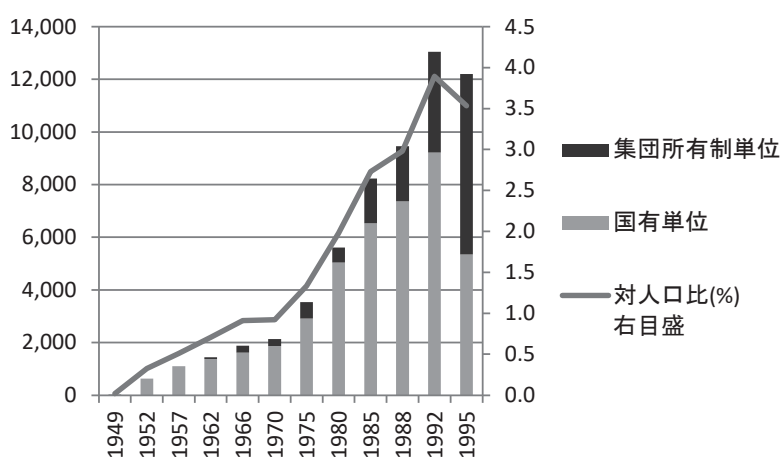


図2 西和県正規職員・労働者数の推移

出所) 西和县志編纂委員会(1997: 261-262, 555)を参照して筆者作成



## (2) 労働

県の労働部門によって管理される、西和県の正規の職員・労働者数の推移は図2の通りである。1960～70年代を通じ、2000～5000人程度で対人口比は0.5～2%未満と、行政幹部と並んで県域内では非常に数の少ない社会集団であったことが知られる。職員・労働者としてカウントされているのは大部分が国有(全民所有制)単位である。

国有部門のなかでも、国有工業企業に限って見てみる。西部地域は現在に至るまで企業体が未発達であり、とりわけ商業部門に比較して工業部門が手薄である(安2019)。毛沢東時期において、第二次・三次産業の基礎はさらに薄弱であった。表2は1995年時点で西和県域に存在していた国有企業の一覧である。ここからみれば、1960～70年代に存在していた国有企業は、印刷工場、農機工場、鉱山、セメント工場、花火・爆竹工場の6社のみで、職員労働者数は1995年現在と同程度であったと仮定しても、1200人ほどに過ぎない。

注意すべきことの第一は、国有企業の立地である。県域で唯一の「都市」である県城(付近)に立地する企業は13社中4社しかない。残りの9社の立地は、特に炭鉱に代表されるように、県内の辺鄙な場所に散らばっている。国有部門=集団部門の軸と県城=農村の軸は重なっておらず、多くの場合、ズレている。第二に、いくつかの企業は、職員・労働者のなかに「交代制農民」や「臨時工」をすでに含んでいる。国有部門のなかに、農村集団部門からの雇用があったことが示されている。これらの人員はすでに労働領域の「交叉地帯」に生きていくといえる。これら農村からの臨時工・契約工については後述する。

## 基建隊

鉱工業部門の立地が県内の農村や僻地に散らばっていたのと同様に、農村の内部にも工業や建設業に近い部門が存在した。ここでも県城=農村の軸と商工業=農業の軸はズレている。

沿海部農村では余剰労働力を吸収することを目的に「農村工業化」が進展し、人民公社や生産大隊が創業する「社隊企業」が発展した。いっぽうで、産業が未発展な内陸部の西和のような県では、非農業での労働力吸収といえば、インフラ建設が主要なものとなる。麦村の調査で見出されたのは、人民公社員は全員が同等の労働力として各種の基本建設に関わったのではなく、青年層・壮年層を中心とした、いわば労働の「エリート」集団が各種インフラ建設に従事していたことである。具体的には、各生産大隊の核心的な労働組織として、150名ほどからなる「基建隊」(「專業隊」とも呼ばれた)が存在していた。1960～70年代に展開された農地、山林、小学校などの麦村の共有財産が創造される過程で、基建隊は無視できない役割を果たしていた(田原2019: 163-168)。

例えば、西和地域の人民公社時期の重要な成果の1つは、棚田の造成である。同県で

表2 西和県国有工鉱業企業一覽(1995年)

企業名	創立時期	直屬単位	立地地点	職員・労働者数	固定資産額(万円)	年間生産額(万円)	納税額(万円)	備考
1 印刷工場	1951	県	県城	46	40	50	3	
2 農機工場	1958	県	県城	87	102	45	4	
3 DJS鉛・亜鉛鉱山	1970	県	LX郷	700	609	1,466	387	
4 セメント工場	1970	県	IX郷	240	380	290	75	
5 花火・爆竹工場	1970	県	県城郊外	180	125	130	15	
6 天水市青羊峡鉛・亜鉛鉱山	1980	地区	SL郷	450	901	884	103	もとはDJS鉛・亜鉛鉱山に所屬、1985年に天水地区の国有企業に
7 JYG鉛・亜鉛鉱山	1984	県	LH郷	650	1,017	2,577	1,224	
8 甘肅アンチモン工場	1986	省	XY郷/TSH郷	918	9,000	1,767	133	省級国有企業。労働者は交代制農民工を含む
9 隴南磨溝鉛・亜鉛鉱山	1990	地区	LX郷	363	1,062	989	106	地区・県の共同経営
10 LX金鉱	1991	県	LX郷	126	500			臨時工45人を含む。1995年操業停止
11 間接酸化亜鉛工場	1992	県	県城郊外	64	166	411	15	花火・爆竹工場から転化。職員・労働者の60人は前工場から
12 西和化学工場	1994	県	XY郷					省内の県営企業の中で投資・規模最大の企業
13 国営和平化学工場西和分場	1996	県	SL郷	70	185	480	120	蘭州国営和平工場と共同経営

西和県志編纂委員会(1997: 343-346)を参照して筆者作成

は1960年から1978年にかけて棚田造成運動が展開され、16万5800畝の棚田が作られた。麦村が属していた宋李大隊の棚田造成は1964年より着手され、1968年から本格的に展開を始め、1977年に一応の完成を見た。造成の手順として、山頂の高い部分から低い部分に向けて工事を行った。造成面積は2000畝ほどで、全耕地の2/3に達したという。

労働組織としての基建隊のもう一つの功績は、造林である。1958年、大躍進前後の森林伐採で、麦村周辺の山林は禿山になったが、1960～70年代に至っては破壊よりも創造に力を入れられるようになり、公社＝大隊＝生産隊の緊密な組織的連携の下で植林が進められた。麦村を含む宋李大隊は、森林伐採に反対していた李言照の指導の下で、1961年から植林に着手した。1970年代にはハリエンジュ（洋槐樹）が西和県に導入され、宋李大隊は1972～73年にかけて1万3,000畝の山林に植樹を行った。ここでも植林運動の中核を担ったのが基建隊だった。

小学校校舎の建設などでも基建隊が活躍した。1973年に宋巴小学校が創設された際には、村民から1500元が集められたうえ、木材の寄付も募られた。そのうえで、基建隊が中心となり、紅江河の河岸の砂地を整備し、その基礎の上に校舎を建造した。

基建隊を一つの「交叉地帯」と看做しうるのは、上級政府が基層レベルに新しい人材を求めた際、大隊書記の李言照は基建隊の中核メンバーの中から人材を選んで推薦したという事実があるためである。基建隊は「集団」の枠組みから派生した1つの労働組織であるとともに、若い人材を育成するための揺籃でもあった。棚田の造成や植林運動は「農業は大寨に学べ」などの政治的なスローガンに絡めて展開されたことから、これら運動の実践を通じ、150名ほどの青年らが国家意識と集団意識の薫陶を受けたであろうことは想像に難くない。これら抜擢された人材の一部はのちに正規＝国有部門の幹部となっている。麦村の範囲だけでも、こうした人材は十数名に上るといえる。そのなかには、過去や現職の天水市秦州区公安局局長、西和県統計局局長、常道鎮鎮長、西和県農牧局局長、河巴郷党委書記、西和県財政局副局長、西和県武装部科長、羅峪鎮農業学校校長などが含まれる。

## 契約工

人民公社から正規・国有部門に派遣された臨時工や契約工も、交叉地帯を行きた人々の例である。西和県の国有工業企業の職員・労働者のなかに「交代制農民工」や「臨時工」が含まれていた点についてはすでに見た。麦村の現場において、県内の国有部門に職を得た事例は少なかったが、国营林場の契約工として働いた人々がいたことが確認された。当時、宋李大隊には50人の契約工（合同工）がおり、隣県である徽県の麻沿林場で働いていた（田原2019：191-192）。

契約工の就業先であった麻沿林場と麦村とは、どのようにして引き合わされたのか。大隊書記の李言照の記憶では、契約工の契約期間は1971年から1981年の10年間であっ

た。当時、西和県は天水地区に隸属しており、その詳細な理由については不明だが、天水の当局は、麻沿林場の50の契約工の定員を西和県に割り当てたという。県の指導部は、さらにこの定員を、川口、劉溝、そして李宋の3つの大隊に割り当てた(3大隊はいずれも現在の河巴鎮の管轄内にある)。ところが川口大隊、劉溝大隊では内部の社員に定員をうまく割り当てることができなかった。また両大隊の書記は李言照とも悪くない関係だったこともあり、50の定員はそっくりそのまま宋李大隊の懐に転がり込むことになった。宋李大隊では、その内部を構成する3つの村におよその人口に応じて定数を割り振った。その結果、麦村から25人、宋巴から12-13人、李山から12-13人の契約工の割り当てとなった。これら契約工のうち、林場で能力を認められた5人は中途から林場に正規採用(转正)となり(麦村から1人、宋巴から2人、李山から2人)、そのうちの3人は林場のリーダー層にまで昇進したという。

興味深い点は、前項で紹介した基建隊による山林の造営や小学校の建築にも、契約工が関わっていた事実である。すなわち、植林の際の苗木や、小学校校舎に必要な木材の一部は、林場の契約工がその職場から獲得して寄付したものであった。

当時であって、農村からの臨時工・契約工の雇用はどのような意味を持っていたのだろうか。ここで二点ほど指摘すれば、第一に、契約工は、都市＝農村の二元構造を硬直化させないための「緩衝地帯」であったということである。農村戸籍の住民を臨時工・契約工として雇用することで、都市戸籍保有者(＝市民)の数を抑制したまま、部門内の労働力不足をまかなうことができる。河北省束鹿県(現：辛集市)をケースとしたBlecher & Shue(1996: 113-120)によれば、同県の工業部門の労働者数は1949年には数百人であったのが、1990年には2万人に増加していた。契約工は1964年から1976年にかけての労働者増加分の76%を占めており、契約工の数は正規工を上回っていた。契約工は工場の宿舎に住み、農村に家と家族を残し、毎週あるいは毎月帰宅した。給料の50%は出身大隊の集団に配分し、残りの半分が本人のものとされた。県政府から見た契約工のメリットは、①商品化食糧、家屋、教育、その他の公共サービス提供の必要がなく、負担が軽い、②臨時契約工は管理側のいうことをよく聞く(解雇されないように、また正規労働者に転ずる希望をもっているため)、③農村の余剰労働力問題の解消などであった。農民を臨時に採用することで、県政府の側は正規労働者よりも低賃金・低福利で、かつ柔軟な雇用計画を実現することができたのである。西和県周辺の「林場」が、政府部門を通じて農民の契約工を採用していたことも、以上と同様のロジックであった。政府にとって交叉地帯は、大前提としての二元的な社会主義システムが凝り固まってしまうための緩衝地帯であった。換言すれば、交叉地帯は二元構造を補完するために不可欠なシステムの一部だった。

第二に、西和県の契約工の事例から見出せたのは、労働部門の交叉地帯が形成される空間的範囲は当該県の県域内に限定されないことである。契約工の派遣先は隣県である

徽県であり、定員の割り当て権限は西和県政府ではなく、一級上の天水地区にあった。同様の事例はかなり普遍的に存在したと思われ、省を超えた人的環流の例もある。筆者の別の調査地である貴州省晴隆県石村でのある村民小組の組長（1945年生）への聞き取りによれば、1966年ころ、当地では広東省のある建築企業から労働者の募集がかかり、石村の範囲から140人ほどが広東に行き、5年間ほど就業していたという。1972年に大部分の者は帰郷したが、広東に残った村民も数人おり、後に会社が山東省に移転するのに伴い、これらの人々も山東に移住したという<sup>4)</sup>。ここでいう「山東に移った人々」は、おそらくは建築企業で正規部門に「転正」した人員と解釈すべきであろう。

以上から、いくつかの点を確認できる。すなわち、①自力更生が謳われた人民公社体制下にあっても、「集団」の外部（他村、県城、隣県など）に存在する正規・国有部門へのアクセス機会が存在したこと。②それら機会へのアクセス権は、県や地区など上級政府が定数を割り当て、さらに人民公社体制下の「集団」の枠組みの下で選抜が行われたこと。さらに、③選抜の過程はすべての村民に平等に開かれていたというよりは、年齢や能力、そしておそらくは基層幹部との「関係」などの要素が総合的に働き、一般の人民公社員よりは一步抜きんでた、集団の「エリート」として選抜されたという点が重要であろう。

### (3) 教育・医療

#### 高級中学生

農村出身の高級中学の生徒も、交叉地帯を生きた典型的な社会集団である。一般的な県域社会には、高等教育機関は存在していない。県域の最高学府は高級中学であり、多くの場合、高級中学は県城に立地している。しかし、高級中学に入学できただけでは、それは都市に住む田舎者を意味するに過ぎない。農村出身者が高級中学を卒業し、大学に合格できてはじめて、卒業後に国家の分配を経て、都市正規部門に移動する可能性が開けたのである。

残念ながら『西和県志』には、集団化時期の高級中学に関する記述は少ない。西和県に高級中学ができたのは1958年と遅く、一学年50人が入学した。かなり数の少ない精鋭である。二校目の高級中学ができたのは1969年のことで、一学年52人が入学した。高級中学生数は、1971年には在校生730人、卒業生278人、1981年には在校生914人の規模であった（西和县志編纂委員会1997:595）。大学入試の復活した1978年、同県から大学本科に進めたのは15人だけである。1980年以前、大学がいかに狭き門だったかが知られる。

#### 帰郷知識青年

ここから大学に合格できなかった農村出身の高級中学卒業生は、多くの場合、帰郷知

識青年（回乡知青）として県城から出身地の農村に帰還したことが知られる。ある統計によれば、1968年から78年までの10年間に西和県の農村は「上山下郷」による知識青年を合計1560人（男性729人、女性821人）受け入れ、各地の生産隊に迎え入れた（挿隊）。出身地別では上海が120人、蘭州が698人、天水が479人、西和県城が263人であった<sup>5)</sup>。注目されるのは県城からの受け入れも「上山下郷」運動に含まれている点だが、その実態は帰郷知識青年であり、全国的に見ればその数は大都市からの下放青年よりも多かった（定2009）。

麦村が受け入れた最も早期の知識青年は、1970～71年にかけてやってきた大学生5人である。蘭州の西北師範大学生で、下放の目的としては自己の鍛錬と宣伝及び文芸活動であった。これらのうちの一人は後に隣県の礼県師範学校の校長となった人物であるが、彼こそが帰郷知識青年であり、麦村出身者でかつ配偶者も同郷ということで、現在でもしばしば村に帰省する。

### 民弁教師

このような帰郷知識青年は多くの場合、村の小学校の教員となった。農村のなかで農業に従事しない、教師のような専門職は、外部世界・都市国有部門にも近い関係にある。麦村周辺に現存している3校、李山、宋巴、麦村の小学校はいずれも人民公社期に創建されたものである。これら農村の学校に教員人材を提供することになったのが、高級中学卒業生、ときには初級中学生卒業生であった。たとえば1973年に創設された前述の宋巴小学校には、教師が3人いた。公社によって招聘されたという意味で、現地では「社請老師」と呼ばれたが、「民弁教師」の呼称の方がより一般的であろう。彼らの多くも高校を卒業後、故郷に戻ってきた「回乡知青」で、小学校ができる以前は現地で成人向けの夜間学校（夜校）の教師をしていたという。当時、これらの教員の給料は政府から支給される月15元とならんで、現地の生産隊から配分される労働点数によっても収入を得ていた。「社請老師」を除き、すべての小学校には政府から給料を受け取る正式の教員（公弁教師）が一人ずつ割り当てられていた。民弁教師も、いつの日か正式な教師に転じる可能性は残されており、その意味で都市と農村の交叉地帯に位置していたといえる。

### 裸足の医者

さらに、帰郷知識青年がいわゆる「裸足の医者」（赤脚医生）になるケースもある。1960年、県城の県医院を中心とする正規のスタッフの数は235人であり、広大な農村は医療の空白地帯として残されていた（西和县志編纂委員会1997：626-627）。1969年、西和県でも合作医療が推進され始めた。合作医療は一人が毎年少量の薬代を支払う極めて小さな投資で済み、「裸足の医者」も公社員として労働点数を稼ぐ方式なので負担は軽く、地元に住んでいるので手軽に診察を受けることができた。鍼灸と漢方の生薬の利用（一针

根、一把草)、あるいは土着的な医療の活用(土医、土薬、土法)、自力での解決(自種、自采、自制、自用)などが提唱されていた。その結果、合作医療は順調に発展し、同年のうちに県内の半数近くの生産大隊で合作医療が実現された。さらに1976年までに、県内の231の全ての大隊で合作医療が立ち上がった。裸足の医者とは247名、生産隊の衛生員は1,007名を数えた(西和县志编纂委員会1997:635)基本的に、大隊ごとに一人の裸足の医者、4人程度の衛生員が配置されたことになる。

それでは集団を単位として配置された裸足の医者とは、どのような人々だったのか。麦村周辺での聞き取りによる興味深い発見の一つは、裸足の医者・農村医師の多くが、かつて好ましくないと考えられた地主階級の出身だったことである。麦村の隣村である柳集村の診療所医師である柳亜玲もそのような一人である。柳の父(1919年生まれ)は天水師範学校の出で、国民党の高官として省都の蘭州で勤務していた。父は30歳で1949年の人民共和国建国を迎え、蘭州で約5年間教員をした後、1954年に故郷に戻り、中医学を学び始めた。1959年には、完成したばかりの紅江ダムで衛生員として働いた。父は1962年に柳集村に戻り、医者となった。前述の通り文化大革命時期、合作医療が推進され、労働点数を稼ぐ裸足の医者が推奨されていた。

息子の柳亜玲は1964年に高級中学を卒業するが、地主階級という家庭出身のため、最初から希望はないと考え、大学入試には参加しなかったという。おそらくは父の援助の下で、独学で中医学の知識を身に付けた後、柳は1970年に裸足の医者として働き始める。彼によれば、地主階級出身の医者は、周辺の村々では一般的だという。出身が悪く、他の職業に就きにくい一方で、家庭の文化的基盤があるので、独学で医学の知識を学び、吸収することができる。また、医師の仕事は人民の利益に沿っているため、職業選択にはメリットのみで、デメリットは伴わない。地主出身であることの政治的リスクを避けることもできる。柳は1992年には「全国優秀医師」に選出されてもいる<sup>6)</sup>。

#### (4) 軍事

さらに一つの「交叉地帯」は、軍事領域に存在した。当時の農民にとり、人民解放軍で従軍することは、高等教育に進むことを除いて、都市の正規部門に入る可能性のある数少ないルートの一つであると考えられていた(定2009:231)。人民解放軍を退役した人員は、出身地の県政府が責任を持って再配置(安置工作)を行う。ここから、軍隊を経て都市の正規部門に参入する可能性も出てくる。1960~70年代の西和县において、毎年どの程度の規模の農民が服役・退役していたのか、それを示すデータは入手できていない。そこで筆者の別の調査地である江西省余干県の例を見てみる。1973年から1982年までに再配置の対象となった退役軍人4,970人についてみると、およそ三つのグループに分かれる;①商品化食糧の配給対象となる都市市民と下放知識青年など874人(18%)については、全員が国営部門、大型集団部門、農林水産場(墾殖場)などに割り当てられ

た。②残りの農村出身者のうちの傷痍軍人 74 人、服役 8 年以上の老兵 39 人、軍事的功績のあったもの 56 人、合計 169 人 (3%) については国営単位、大型集団単位に割り当てた。③残りの 3,927 人 (79%) については出身地の農村に配置された (江西省余干県志編纂委員会 1991: 451-452)。退役後、ごく少数の農村出身者が都市部門に参入しているが、大部分は農村に帰郷したことがわかる。

### 第 3 節 交叉地帯と人的環流

行政・労働・教育・医療・軍事の諸領域について、都市＝農村間の交叉地帯に着眼し、中国西部の平凡な県の実態に即しながら記述してきた。集団化時期に都市＝農村間を人が移動する際、必ず経由しなければならなかったのが交叉地帯だった。実のところ、行政や労働、教育や軍事などの諸領域は一つの地域社会のなかで、有機的に結び付きながら交叉地帯を形成していた。本節では各領域を跨いだ人的環流を統合的に結びつけながら、いくつかの知見として提示してみたい。

まず指摘できるのが、二元構造の形成期として捉えられる 1960～70 年代にあっても、農村から交叉地帯を経て実際に都市の正規部門に入り込んだ人々の足跡が少数ながら存在したことである。麦村ではインフラ建設組織である基建隊で好ましい仕事ぶりを示した人材が、村支部書記の紹介を経て県の政府部門に抜擢されていた。また林場の契約工の中からも正規職員に転ずる者がいた。黒竜江省のある人民公社の事例でも、国営の林場において、一般の契約工の場合は 1 ヶ月なら 1 ヶ月行って終わったら公社に戻るが、「長く行っている人は国の方で、この人はよくできると言って国の職員に抜擢し、国の労働者になる」(アジア経済研究所 1977: 43) との証言がある。

もっとも実際には、交叉地帯に踏み込んだ人々の大多数は比較的長期間、その内部に留まりつつ、旋回・環流し続けていたと思われる。西和県域の諸事例から注目されるのは、交叉地帯の内部での、異なる領域間での人の移動はかなり活発であった点である。

第一に教育部門で、高級中学卒業生が、大学という正規部門への登竜門をくぐることに失敗したのち、県内に残って様々な形で「活躍」した例は少なくなかった。前節に見たとおり、西和県内でも「回郷知青」は相当に普遍的で、麦村周辺でもこのような人材が夜間学校の教師や小学校の民弁教師 (麦村の呼び方では「社請老師」)、あるいは裸足の医者となっていた。

教育部門から労働部門に移行する例もある。麦村五社の住民である何偉山は、1978 年に高級中学を卒業後、近隣の徽県や成県、あるいは天水の小隴山などの林場で 10 年ほど就労していた。注目すべきことに、何はさらに続けて、甘肅省内の靖遠炭鉱でも三年間働いている。このように、高校を卒業して故郷に戻った人材は、交叉地帯の他の領域とも親和的であった可能性が示唆されている。路遥『平凡的世界』(路 2000) の主人公の



一人、孫少平も高級中学→民弁教師→炭鉱労働者というコースを辿ったことが想起される。舞台は1981年秋の「銅城鉱務局大牙湾炭鉱」である。農村出身の孫少平と同時に炭鉱に入った40数名はいずれも公社、県などの末端幹部の子弟であった。母親が農村戸籍であったために本人も農村戸籍のままになっており、そこから抜け出すために炭鉱に応募し、いずれは炭鉱以外の都市正規部門に移ることを希望していた若者たち、として描かれている。ポイントは、炭鉱は国営の正規部門であり、そこで働く者はすでに正規の労働者であるという点である。ただし危険が伴う仕事でもあり、給料もその分、高いが、いつまでも続けられる仕事ではない。この交叉地帯に生きた無数の農村出身者の主観的な葛藤を描くことこそ、路遥文学の中心テーマであった。

第二に、従軍経験も交叉地帯に親和的である。前述の通り、農村から従軍した者の大多数は農村集団部門に再配置された。しかしながら、同時に、軍隊経験者は多くの場合、ヒラの人民公社員に戻ってしまうというよりは、交叉地帯のなかに取り込まれ、その内部の人的環流のルートに乗った。その受け皿となったのが、農場や林場、あるいは公社のなかでも社隊企業など、非農業部門で比較的待遇の良い仕事であった<sup>7)</sup>。黒竜江省の事例でも、人民公社に林業ステーションがあり、退役軍人が山の監視を行っていた。このインタビューによれば、「思想が進んでいる」人は県の方で仕事を割り当てるが、そうでない退役軍人は、このように公社の林業ステーションのような仕事に回されるという（アジア経済研究所1977:54）。ここでいう林業ステーションも林場と同様に、交叉地帯を代表する領域と考えられる。

第三に、従軍経験のある者が基層幹部になるというのはかなり普遍的であった。これは宋李大隊の支部書記、李言照の例からも伺われる。李は1931年前後の生まれで、小学校には2～3年通い、多少の識字能力を付けた後、建国以降は夜間学校にも通った。兄が従軍したこともあり、李も1956年に従軍している。このように、従軍の経験は基層幹部の職位にかなり親和的である点が示唆されている。集団意識、国家意識など、軍隊で要請される資質は基層幹部にも共通していた<sup>8)</sup>。

第四に、改革後の時代にあっても、従軍経験と出稼ぎやビジネスなどの親和性が示唆されている。麦村近辺では、以下のような事例がある。麦村五社村民の陳恵林の嫁ぎ先は何巴郷に隣接した川口郷だったが、彼女の舅の兄弟に当たる人物が1983年に従軍し、退役後に浙江省杭州の金沙湾の工場で働き始めた。1986～87年ころ、この人物が帰省中に麦村の陳恵林の実家に親戚訪問したことがきっかけで、陳自身や陳の実弟である根社（1968年生まれ）をはじめとして、多くの麦村村民が杭州に出稼ぎに出るようになったという。現在に至るまで、麦村村民の出稼ぎ先の八割ほどは杭州である。その他の従軍関係者のなかには、退役後に近隣の成県の鉱山で8年ほど経営者をしていた陳三会（1956年生まれ）などがある。このように、一般によく指摘される通り、従軍経験がその後のビジネスのためのネットワーク形成につながることは稀ではない。

集団化時期、都市と農村の間にはいわば不平等なスタートラインが引かれていた。この大前提のもとで、交叉地帯はいわば農村側の人材がプールされる場所であったといえる。その内部に止まって旋回を続けていれば、次の移動のチャンスも生まれやすくなり、最終的に都市＝正規部門への移動を遂げる可能性も出てくる。例えば西和県志のなかにも、1980年12月、「『山区建設』のために、辺鄙な山岳地帯に帰郷中の知識青年の中から優秀な者16人を（正規の幹部として——引用者）抜擢した（西和县志編纂委員会1997:555-556）」との記述がみられる。これらの人員の移動のパターンを示せば、高級中学進学で農村から都市（県城）に→帰郷（生産隊会計や民弁教師）→正規幹部として抜擢、となる。また作家である閻連科の経歴も示唆的である。閻は河南省嵩県の農村出身であり、高校を中退して叔父が臨時工として働いていた河南省新郷市のセメント工場で二年間、就労したのちに人民解放軍の創作学習班で小説を書き始め、作家として成功している（閻2009）。図式として示せば、高級中学→臨時工→従軍→正規の作家となり、まさに交叉地帯を渡り歩いた人生である。

## むすび

以上の考察から本稿の結論として、簡潔に以下の点を指摘したい。すなわち、静態的に理解されがちな「都市＝農村二元構造」は、実のところかなりの動態を内包していたということである。それはよく知られた知識青年の「上山下郷」運動などには限定されない。二元構造は、その補完物ないしは安定装置としての交叉地帯を必要としていた。そして交叉地帯が存在すればこそ、政府の側も農民の側もそれぞれの思惑でこれを利用し、結果として同地帯を介した都市と農村の間の人的環流が生じてきた。さらに交叉地帯の内部の行政、労働、教育、軍事など諸領域間の人的環流はさらに活発であって、一旦交叉地帯に入り込んだ者は比較的長期にわたってその内部を旋回する傾向にあった。農村から交叉地帯をへて都市正規部門に完全に移行するケースもなくはなかったが、多くの農村出身者は交叉地帯に滞留し、純粋な人民公社員に回帰することなく、交叉地帯にありながら農村の人材として役割を果たし続けた。

ここからは改革以降、現在にまで至るインプリケーションが得られる。集団化時期中国の交叉地帯は、改革後の都市と農村のための幹部候補生・人材がプールされ、養成される「貯水池」だったことだ。交叉地帯の経験は、農村の範囲を超えた経験・知識・技能・人脈を農村住民にもたらした<sup>9)</sup>。こうした人材は人民公社解体後、直ちに消えてしまったわけではなく、農村改革後の基層幹部を含む農村基層人材（教師、医師など）として現在に至るまで連続している<sup>10)</sup>。人民公社時代の交叉地帯で育まれたのは「集団エリート」とも呼べ、改革以降の時期の農村ガバナンスにおいて、外部資源（政府の補助金など）を内部化する上でも少なからぬ影響を与えている<sup>11)</sup>。その意味でも、集団化時期の中国社会

を理解することは、大国となった現在の中国を理解する上でどうしても避けて通れないのである。

最後に、本文で意識的に強調はしなかったが、集団化時期の交叉地帯に生きた人々は、実のところ圧倒的に当時の青年層が中心であった。逆に見れば中年層・壮年層以上の人々の流動性は低く、完全な都市あるいは完全な農村のどちらかに止まり続けることが多かった。路遥が描き続けた交叉地帯のモチーフは、都市と農村の間を生きた青年たちの夢や憧憬、挫折や苦悩といった主観的な、しかし同時代的に広く共有されもした、文化心理とでも呼ぶべき対象だった。この文化心理の問題について、本稿ではほとんど手を付けることが叶わなかった。次なる課題としたい。

## 注

- 1) 県域社会についての筆者の理解に関しては、田原(2015; 2020)を参照。
- 2) 「麦村」とは筆者が同村に与えた仮名である。村名を除き、本文の県レベル以下の地名や人名には全て仮名ないしはイニシャルを用いる。筆者の西和県域と麦村での現地調査は、2009年7月、2010年8月、2011年8月、2015年5月、2016年7～8月の5度にわたり、合計7週間ほどの住み込みを通じ、村民や村幹部へのインフォーマルな形での聞き取りと参与観察を行った。本文の記述は、特に注記しない限り、この間の現地調査で得られたデータを相互参照しつつ使用するものである。
- 3) 行政系統における正規部門・非正規部門の区別は、国家幹部の定員に含まれるか否かの違いである。1956年、西和県の国家行政幹部は903人(男性870、女性33)であった(そのうち、県級の指導者が2人、科級(県直属機関)が113人、区や郷の指導幹部が122人、その他一般幹部が646人)。また1981年、行政単位のみならず、事業単位・企業単位を含めた幹部数は2192人である(西和县志编纂委員会1997: 555)。二つの時期の幹部数の対人口比はそれぞれ0.4%と0.7%である。国家幹部という存在は、県域という視野のなかで見れば、非常に希少な、それゆえ高い権威を備えた指導的なグループであることが分かる。
- 4) 2016年8月25日、貴州省晴隆県石村下寨子組長、柳洪代への聞き取り。広東に5年間滞在したお陰で、柳は当地の老人にしては珍しく、標準語を操る事ができる。本エピソードも「なぜ標準語を話せるか」という点を糸口として開陳されたものである。
- 5) 趙(2004: 129)を参照。実際のところ、下放知識青年の受け入れは当時の生産大隊の重要な任務の1つであり、宋李大隊書記であった李言照と知識青年受け入れ担当であった何芮恵は、インタビューのなかでともに知識青年関連の任務について回顧している。宋李大隊には二度にわたって知識青年が下放してきたが、ともに蘭州原子力504工場の労働者子弟、高級中学卒業生で、まず蘭州の農場に配属されたのちに宋李大隊にやってきた。当時、宋巴、麦村にはそれぞれ知識青年の居住する厨房や倉庫を備えた住宅(知青点)が建てられた。1973年7月、第一陣の下放青年が合計12人やってきて約2年間、住み込んだ。第一陣の青年たちが去った後、1975年末には第二陣の24人(10人との説もある)を受け入れた。これらの下放青年たちうちの2人は教師として働き、その他は一般の労働に従事したという。
- 6) 2011年8月10日、甘肅省西和県柳集村医師、柳亜玲への聞き取り。
- 7) 農村戸籍の退役者の側も「退役後、農村のなかでできるだけよい職業に就きたいと強く望んでおり、また行政がそのための政策的、資金的支援を行うべきであると考えて(佐藤1997:

- 13)」いた。
- 8) 浜口 (2000: 125) によれば、「この時期 (50 年代前半——引用者) に見られた特徴は、幹部の中に解放軍帰りが目立つようになったことであった。彼らは、多くが党員であること、進行中の新しい政策が理解できること、軍にいたときの関係をとおして上級組織にコネクションをもっていること、組織的活動に慣れていることなど、基層幹部に相応しい条件を備えていた。加えて彼らは、何がしかの国家との同体感、国の要請を受け入れて働こうという、いわばナショナリズムともいべきものを、より濃厚にもっていたことも否定できない」という。
  - 9) 佐藤 (1997: 11) は、「外地就業 (臨時工・契約工など) も農村地域社会の範囲を超える活動経験や特定の技能・知識習得を可能にする職歴として、軍歴と同様の意味合いを持っている」と指摘している。
  - 10) 2007 年の農業センサスによれば、共産党村支部書記と村民委员会主任のうちの退役軍人比率はそれぞれ 21.5%、13.4% であった (國務院第二次全国农业普查领导小组办公室・中华人民共和国国家统计局 2009: 276)。
  - 11) 田原 (2019) を参照。このほか、山田 (2020) は、現地調査に基づき、中国の「集団」の枠組みに関わる基層幹部や集団所有制度を、農地の株式合作化や集約化など近年の農政の展開を促進する要素として見出している。

## 参考文献

### 〈中国語〉

- 安永军 (2019) 《中西部县域的“去工业化”及其社会影响》《文化纵横》2019 年第 5 期。
- 定宜庄 (2009) 《回乡知青的处境》金大陆・金光耀主编《中国知识青年上山下乡研究文集 (上)》上海：上海社会科学出版社。
- 國務院第二次全国农业普查领导小组办公室・中华人民共和国国家统计局编 (2009) 《中国第二次全国农业普查资料汇编 (综合卷)》北京、中国统计出版社。
- 江西省余干县志编纂委员会编 (1991) 《余干县志》南昌：新华出版社。
- 路遥 (2000) 《平凡的世界 (上、中、下)》北京：中国青年出版社。
- 潘鳴嘯著・欧阳因译 (2013) 《失落的一代：中国的上山下乡运动 (1968-1980) (增藏版)》北京：中国大百科全书出版社。
- 西和县志编纂委员会编 (1997) 《西和县志》西安：陕西人民出版社。
- 阎连科 (2009) 《我与父辈》昆明：云南人民出版社 (= 飯塚容訳『父を想う——ある中国作家の自省と回想』河出書房新社、2016 年)。
- 赵继士 (2004) 《知识青年上山下乡》政协西和县委员会编印《西和文史资料》第二辑。

### 〈日本語〉

- アジア経済研究所編 (1977) 『人民公社制度研究の視角と方法：試論』(アジア経済研究所所内資料調査研究部 No.51-7)。
- 岡田英弘 (1983) 「東アジア大陸における民族」橋本萬太郎編『漢民族と中国社会』山川出版社。
- 佐藤宏 (1997) 「中国人民解放军の農村の基盤：実地調査による試論」『アジア研究』第 43 卷第 2 号。
- 斯波義信 (2002) 『中国都市史』東京大学出版会。
- 田原史起 (2004) 『中国農村の権力構造：建国初期のリーダー再編』お茶の水書房。
- (2008) 『二十世紀中国の革命と農村』山川出版社。

- (2015) 「中国の都市化政策と県域社会：『多極集中』への道程」『ODYSSEUS 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』19, pp. 29–48.
- (2019) 『草の根の中国：村落ガバナンスと資源循環』東京大学出版会。
- (2020) 「都市化政策と農民：『県域社会』の視点から」東大社研現代中国研究拠点編『現代中国ゼミナール：東大駒場連続講義』東京大学出版会。
- 浜口允子 (2000) 「村と幹部」三谷孝他著『村から中国を読む：華北農村五十年史』青木書店。
- 安本実 (1995) 「路遥文学のキーワード・『交叉地帯』について」『姫路獨協大学外国語学部紀要』第10号。
- 山田七絵 (2020) 『現代中国の農村発展と資源管理：村による集団所有と経営』東京大学出版会。

〈英語〉

- Bernstein, Thomas P. (1977) *Up to the Mountains and down to the Villages: The Transfer of Youth from Urban to Rural China*, New Haven: Yale University Press.
- Blecher, Marc and Vivienne Shue, 1996, *Tethered Deer: Government and Economy in a Chinese County*, Stanford: Stanford University Press.
- Brown, Jeremy (2012) *City versus Countryside in Mao's China: Negotiating the Divide*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Day, Alexander F. (2013) *The Peasant in Postsocialist China: History, Politics, and Capitalism*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hasan, Zoya (2009) *Politics of Inclusion: Caste, Minorities, and Affirmative Action*, New Delhi: Oxford University Press.
- Whyte, Martin King ed, (2010) *One Country, Two Societies: Rural-Urban Inequality in Contemporary China*, Cambridge, Massachusetts, and London, England: Harvard University Press.

[付記]

本稿は、2021～2025年度 KAKENHI 「中国の『県域』をめぐる歴史社会学的研究——都市＝農村関係と人的環流」（課題番号：21K12401、研究代表者：田原史起）による成果の一部である。